

Eventive Construction 考¹

加 藤 主 税

A Remark to Eventive Construction

Chikara KATOH

我々は外界を時間的には「コト」として、空間的には「モノ」として、切り取って把握している。言語の簡潔性、経済性などの理由から、英語においては、本来「モノ」を表わすべき表現が「コト」を表わすのに用いられることが、日本語より多い。故に二義性が生じることになる。本稿では、この二義性を異なる基底構造をもつ別の表現であり、表層構造において、同一になったものとする。 「コト」を表わす「モノ」表現は「コト」を表わす「コト」表現と同様に基底構造において、EVENTを有し、それ故この種の句を eventive NP と命名する。この EVENT は表層にいたる段階で消去される。nominalization は本来 eventive NP のみであるはずであるが、non-eventive NP も存在することは注意を要する。さらに eventive construction と日本語との関係を論じ、eventive という概念が英文理解上不可欠であることを示す。

1. 序

(1) The mere thought filled me with terror.

(1)の英文から直訳体の日本語を作ると(2)のようになる。

(2) その単なる考えは私を恐怖心でいっぱいにした。

非人称主語構文を日本語に合うようにするには(3)のように公式化することができるであろう。

(3) X + 他動詞 + Y → X にによって Y は自動詞²
(X は非人称, Y は人称)

(3)の公式を利用すれば(1)に対する訳文は(4)になるであろう。

(4) その単なる考えによって、私は恐怖心でいっぱいになった。

しかし、(1)の意味は(5)の日本語で示されるものである。³

(5) そのことを考えただけで、恐怖心でいっぱいになった。

この(4)と(5)の差は(2)と(3)との差とは少し性質を異にしているように思われる。つまり(2)の日本語から(4)の日本語にするには、(3)の公式を使わなくても、(あるいは知らなくても)日本語を母国語としている人には比較的容易に想像できる。換言すれば、(2)は日本語としては正常な文ではないが、その意味は理解できるのであり、(4)の意味に近いものは(2)の文から把握できる。しかし(4)と(5)の差に関して、(4)の意味から(5)を推測することは不可能で

ある。(5)の意味は(1)の文の基底構造を(6)としてのみ理解できる。

(6) The fact that I thought it merely filled me with terror.

(7)は次の(8)、(9)の解釈が可能である。

(7) A patient delayed me.

(8) A patient tried to delay me successfully.

(9) The fact that there was a patient delayed me. =As there was a patient, I was late.

(9)の解釈は(8)の主語が人であるにもかかわらず、非人称主語構文としたものである。

同様に次の(10)は、(11)、(12)のように2通りの意味をもっている。

(10) Strangers frightened my dog.

(11) Strangers frightened my dog by throwing stones and doing something.

(12) The fact that there were strangers frightened my dog. =As there were strangers, my dog was frightened.

上記(6)、(9)、(12)は当然であるが、特に(1)、(7)、(10)のように外見上は「モノ」を表わす表現であるのに、その意味において「コト」を表わす表現も、eventive construction と呼ぶ。⁴ この種の構文の基底構造及び、その派生

、あるいは教育的指摘が本稿の目的である。

2. 主辞吸収と賓辞吸収

我々は世界を空間的には「モノ」として、時間的には「コト」として把握する。たとえば、「白い顔」を見るときには、2通りの見方が可能である。空間的には the white face として、時間的には the face is white として認識している。「モノ」表現と「コト」表現とは、外界世界の分割認識のしかたが異なるのであり、意味が異なるということができる。ただし、同一現象に対する2通りの記述の方法とすると、意味と外界世界とを同一視すれば、「コト」表現と「モノ」表現とは、ほんの表現上の異形にすぎない、との意見がでるかもしれないが、ここでは、意味とは、外界世界の諸現象よりも、人間の認識方法に近いものとして考え、それ故、そのレベルにおいて、「モノ」表現と「コト」表現とは基本的に異なっている意味を有するものとして考える。

英語においては、日本語においてより、「コト」を「モノ」表現で記述する傾向が強い。毛利 可信教授 (1962) によれば、英語には Semanteme の表現において、S+P (that-clause など) よりも M+N (修飾語+名詞) を愛好する傾向がある。

(13) He was scared at her white face.

たとえば(13)において her white face は「彼女の白い顔」という「モノ」を表わすのが普通であるが、この文においては「コト」つまり、「彼女の顔が白いということ」を表わしている。⁵ つまり、「モノ」を表わすのにもっぱら使われる表現である。「モノ」表現でもって「コト」を表わしているのである。いかにしてこの表現が生まれたか、その道すじをたどってみよう。まず(14)のように「コト」表現でもって「コト」を表現するような文、つまりこれはもっとも意味に忠実な表現といえることができるが、が考えられる。

(14) He was scared at the fact that her face was white.

(14)の文に、英語の簡潔性を好む傾向により、その名詞化が行われると(15)になる。

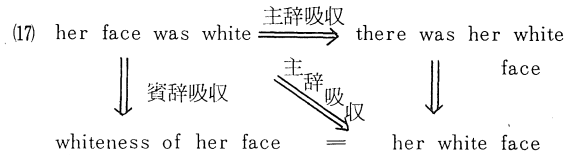
(15) He was scared at the whiteness of her face.

(15)における the whiteness of her face は元來賓辞であった white を名詞化したものを中核語としての名詞表現であり、換言すれば、賓辞を吸収して中核語にしたので、これを賓辞吸収という。

(16) He was scared at her white face.

(16)のように元來の主辞を中核語にした名詞化表現を主辞吸収という。⁶ (15)は whiteness が抽象名詞なので、「モノ」を表わさないで、「コト」を表わすのは当然である

のに対し、(16)の white face は「モノ」も「コト」も表わすことができる。従って amiguity が存在する。英語においては、この主辞吸収と賓辞吸収とを比較してみると、抽象名詞よりも具体名詞を中核語とする傾向⁷があるので、主辞吸収がより頻繁に使われる。日本語においては、この主辞吸収はあまり見られない。故に英文理解においては、主辞吸収は大きな問題を含んでいると思われる。



(17)はこのような2種の過程を図示したものであるが、(16)における there was her white face は her white face にいたる過渡的なもので、主辞吸収を行っているにもかかわらず、文(節)の形式をもっているものである。本稿では「コト」を表わす「モノ」表現、つまり主辞吸収を含んだ文、および「コト」を表わして、賓辞吸収を含んだ文あるいは、普通の「コト」表現を eventive construction と呼び、「モノ」を表わす「モノ」表現を non-eventive construction と呼ぶ。her white face は non-eventive な解釈においては、その表層に近い意味をもち問題はないが、eventive な解釈においては、her face is white に近い基底構造をもつ。つまり「モノ」を表わす「モノ」表現と「コト」を表わす「モノ」表現は表層構造では同一であるが、異なる基底構造をもつという仮説をもって論を進めてゆきたい。

3. Exisential eventive と non-exisential eventive

ここではまず、主辞吸収による eventive construction の基底構造を考えてみよう。

(18) Strangers frightened my dog.

(19) Strangers frightened my dog by throwing stones and doing something.

(20) The fact that there were strangers frightened my dog.

(18)はすでに述べたように(19)、(20)の意味を有する。(19)は non-eventive な解釈であり、(20)は eventive である。

(18)は次の(21)、(22)の基底構造をもつ。

(21) [strangers]
NP

(22) [EVENT[[strangers] [EXST]]]
NP₂ VP S NP₁

(21)、(22)の基底構造は(23)、(24)の書き換え規則をもとにしている。

- (23) NP₁ → Det+N
 (24) NP₁ → EVENT+S
 S → NP₂+VP
 VP → EXIST

(22)において、EXIST は消去されないで残ると、表層では there be および exist となって残る。同様に EVENT は表層では the fact, the event, が導入される。この EXIST, EVENT が消去された構造は「コト」を表わす「モノ」表現である。この EVENT を基底造構において有するのが eventive construction であることはすでに述べたが、EXIST を基底にもつ文は eventive construction の下位分類の一つである existential eventive construction である。

(25) The dressed-up lady surprised me.

(25)は次の(26), (27), (28)の意味をもち、それぞれ(25)の the dressed-up lady の部分は(29), (30), (31)のような書き換え規則に適応される。

- (26) The dressed-up lady surprised me purposely.
 (27) The fact that there was a dressed-up lady surprised me.
 (28) The fact that the lady was dressed-up surprised me.
 (29) NP → Det + Adj + N
 (30) { NP₁ → EVENT+S
 S → NP₂+VP
 NP₂ → Det+Adj+N
 VP → EXIST
 (31) { NP₁ → EVENT+S
 S → NP₂+VP
 NP₂ → Det+N
 VP → be+Adj

それで(25)の基底構造は(32), (33), (34)になる。

- (32) [[the] [dressed-up] [lady]]
 Det Adj N NP
 (33) [EVENT [[[the] [dressed-up] [lady]]
 Det Adj N NP₂
 [EXIST]]]]
 VP S NP₁
 (34) [EVENT [[[the] [lady]]] [be
 Det N NP₂
 [dressed-up]]]]]
 Adj VP S NP₁

(32)は non-eventive, (33)は existential eventive, (34)は non-existential のそれぞれ基底構造である。(25)のように名詞句が「形容詞+名詞」の場合には2種の eventive の構造が考えられ、基底構造に EXIST がないので、non-existential eventive と呼ぶのである。

4. 関係節消去変形

non-eventive, existential eventive, non-existential eventive の基底構造とそれらの派生順序を述べる前に、名詞句の性質について調べてみたい。変形文法理論においては、the red rose や the tall man のような「形容詞+名詞」の構造は、最初から基底構造において存在していたのではなく、変形によって生成された派生構造であって、表層構造とは異なった基底構造つまり、the rose which is red, や the man who is tall などのような関係節構造をもったものとする説が大勢を占めている。⁸

ここでは、Bach (1968) の説を中心にして、その説を横討してみる。Bach (1968) は「形容詞+名詞」が基底構造において、関係節を含んでいることは当然ながら、さらに述語名詞以外のすべての名詞(句)は基底において関係詞をもっており、変形によって派生されるべきことを主張している。

- (35) I met an intelligent man at the party.
 (36) I met a man who was intelligent at the party.

たとえば(35)と(36)とは文体的異形にすぎなくて、(35)は(36)に近い基底構造をもっており、(36)に「関係詞+be」消去変形がかかり、さらに、形容詞移動変形が作用して、(35)が生成される。(36)から(35)が派生されることと、「関係詞+be」消去変形を発展させて、次の(37)は(36)に近い基底構造をもっと述べている。

- (37) I met a bachelor at the party.
 (38) I met someone who was a bachelor at the party.

(38)から(37)を派生するには、上記の「関係詞+be」消去変形と、ここで Bach が導入する不定代名詞消去変形が必要である。Bach のこの提案のもっとも重要な根拠は「事物は時の流れに応じて変化する。」ということであり、たとえば(39)の例をあげている。

- (39) John's wife was born at home.

(39)において、「ジョンの妻」は生まれた時から「ジョンの妻」ではないのであって、ずっと後になってから「ジョンの妻」になるので、厳密には(40)のように表現すべきものである。

- (40) The one who is John's wife was born at home.

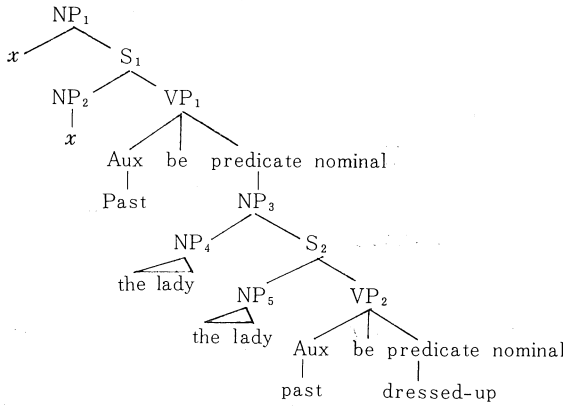
また(41)も論理的には不合理であって(42)のように表現すべきものである。

- (41) The rock is now a pile of dust.
 (42) The thing that was a rock is now a pile of dust.

次に64のように名詞句が「形容詞+名詞」からなる文の基底構造を検討してみよう。この場合には non-eventive, existential eventive, non-existential eventive の3通りの解釈が可能であることはすでに述べたところである。

64 The dressed-up lady surprised me.
non-eventive の場合は65のようになり、65はこの基底構造にもっとも近い表現である。

65



65 Someone who was the lady who was dressed-up surprised me.

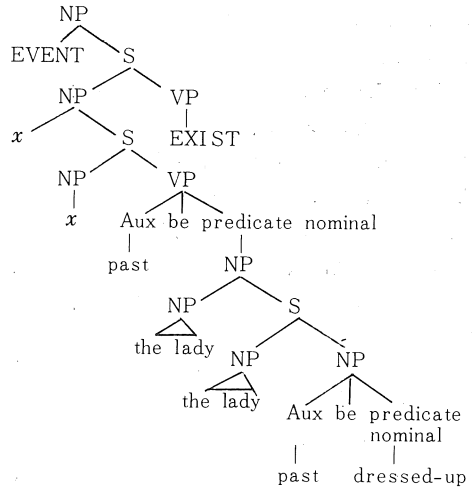
67は65の基底構造からの派生順序とそのため用いられた変形の種類である。

- 67 1. [x [x be [the lady[the lady be dressed-up]]]]
S NP S NP
- 2. [x [x be [the lady be dressed-up]]]]
S S NP
- 3. [x [x be the dressed-up lady]]]
S NP
- 4. [the dressed-up lady]
NP

同一主語消去変形
刈り込み変形
be 消去変形
形容詞移動変形

existential eventive の基底構造は68である。

68



68は65の構造をそのまま表層に移した表現である。

69 The fact that someone who was the lady who was dressed-up existed surprised me.

68の構造は69が示す順序によって、64の文に派生される。

- 69 1. [EVENT [x [x be lady [the lady be dressed-up]]]] EXIST]]
S NP S S NP
- 2. [EVENT [x [x be [the lady be dressed-up]]] EXIST]]
S S S NP
- 3. [EVENT [x [x be the dressed-up lady]]]
S NP
- 4. [EVENT [the dressed-up lady EXIST]]
NP S
- 5. [EVENT[the dressed-up lady]]]
NP NP
- 6. [the dressed-up lady]
NP

同一主語消去変形
刈り込み変形
be 消去変形
形容詞移動変形
EXIST 消去変形
EVENT 消去変形

次に non-existential eventive の基底構造を考えてみる。すでに述べたように、64の non-existential eventive の解釈は69になる。

69 The fact that the lady was dressed-up

surprised me.

④の existential eventive は②になり、①と②とを比較すると、意味的にも、構造的にもかなり類似していることがわかる。

② The fact that the dressed-up lady existed surprised me.

つまり、①の was を消去し、名詞、形容詞の語順を変えたものと、②の existed を消去したものは同一になる。そしてこの際、be 消去変形、形容詞移動変形、EXIST 消去変形は、すでに導入されているので、意味上の変化はないことは容易に推察される。そこで、non-existential eventive は existential eventive と同一の基底構造、つまり⑧の構造から異なる変形順序によって派生されるものと見ることが可能であろう。③はその使用された変形の種類と、派生順序である。

- ③ 1. [EVENT [x [x be [the lady [the lady be dressed-up]]]] EXIST]]
 2. [EVENT [x [x be [the lady be dressed-up]]] EXIST]]
 3. [EVENT [x [x be [the lady be dressed-up]]]]
 4. [EVENT [the lady be dressed-up]]]
 5. [the lady be dressed-up]]
 6. [the dressed-up lady]]

同一主語消去変形
 刈り込み変形
 EXIST 消去変形
 be 消去変形
 EVENT 消去変形

③の1, 2は⑥の1, 2と構造が同じであり、③の3から⑥の派生順序が異なってくる。換言すれば、non-existential eventive の場合には、existential eventive と比べて、EXIST 消去変形が早い段階で操作され、もっとも低いSの中のbe消去変形が、遅い段階でかけられるのである。③の4の中間構造が直接的に導びかれてできる表層構造は④である。

④ The fact that the lady was dressed-up surprised me.

3章で我々はeventive constructionにはexistential eventive と non-existential eventive の2種が存在することに触れたが、ここにおいて、それらは基底構造が同一であり、単に派生順序が異なる文体的異形にすぎないことを指摘した。2章では述べた、主辞吸収、賓辞吸収の図式⑦をここで再び取り上げてみると、次の⑤になる。

⑤ her face was white $\xrightarrow{\text{主辞吸収}}$ there was her white face
 \Downarrow 賓辞吸収 \swarrow 主辞吸収 \Downarrow
 whiteness of her face = her white face

⑤において her face was white がここでの non-existential eventive に、there was her white face が existential eventive に相当するものであるが、there was her white face は her face was white から her white face にいたる過渡的表現であって、ここに述べた、existential eventive と non-existential eventive は同一基底構造をもつという提案と一致する。

6. 賓辞吸収と eventive construction

賓辞吸収による eventive construction は次の⑥のように作られる。

⑥ her face was white $\xrightarrow{\text{賓辞吸収}}$ whiteness of her face

⑥が示していることは、賓辞である white を名詞化し、それを中核語とする名詞句表現を作る過程のことである。whiteness で表わされる「モノ」は存在しないので、賓辞吸収による名詞句はすべて eventive construction であり、non-eventive な解釈はあり得ない故にこの種の表現には二義性が存在しないので、主辞吸収ほど、問題は少ない。つまり、意味理解の際に⑥の逆の道すじ、whiteness of her face \Leftrightarrow her face was white は一本のみであり、それをたどることは容易である。しかし本稿の序であげた例文(1)、(ここでは再び⑦として取り上げるが)、についてはこのことはあてはまらない。

⑦ The mere thought filled me with terror.
 ⑦において、thought は「コト」と「モノ」の両者を表わし得る。「コト」の場合には、本稿では eventive construction と呼んでいるものであるが、次の⑧からの賓辞吸収の結果生じる。

⑧ The fact that I thought it merely filled me with terror.

⑦は賓辞の thought (think) を名詞化したものを中核にしての名詞句表現である。賓辞吸収の場合には non-eventive は存在しないことは、前に述べたが、⑦の文においては、non-eventive の解釈もあり得る。つまり⑧とパラフレーズできるものである。

⑨ The mere thing that I thought filled me with terror.

⑥7の non-eventive な解釈は⑧9の賓辞である thought (think) を名詞化したものが, thought (think) の目的語になるべき内容そのものを表わす場合である。think の名詞形のついた構造は, Chomsky (1970) に, Derived nominal と呼ばれているが, それはeventive のみを含み, ⑧9の non-eventive は含んでいない。同様に次の⑦0, ⑦1は, それぞれ Gerundive nominal¹¹, Mixed form¹², (Action nominal¹³) と呼ばれ, Fraser (1970) によれば, ⑦0はfact を, ⑦1は manner を表わしている。

⑦0 His drawing the picture rapidly pleased her.

⑦1 The rapid drawing of the picture is not so easy.

⑦0はもちろんのこと, ⑦1も本稿での eventive construction に含まれる。基本的には eventive construction は「コト」, つまり event (fact) を表わすが,¹⁴ 場合によっては, 態様, 結果, 方法, 程度, 感覚, 時間, 問題, 理由などの意味を表わす。¹⁵

⑦2 Flood probably cause the greatest loss of life. (結果)

⑦3 His arrival will be late. (時間)

⑦4 His intelligence pleases me. (程度, 事実)

⑦5 The commonest form of forgetfulness, I suppose, occurs in the manner of posting letters. (様態)

⑦6 I had better explain our use of the manual alphabet. (方法)

本論に戻ると, ⑦0, ⑦1に関して, ⑦7の non-eventive な解釈については, Chomsky (1970) をはじめ, Fraser (1970) その他 Newmeyer (1971), Wasow and Roeper (1972), も触れていない。

⑦7 His drawing was wonderful.

⑦7は eventive の意味, すなわち Gerundive nominal (fact) と Mixed form (manner) および non-eventive の意味の3通りの意味を有する。Non-eventive な意味とはこの場合, 「彼の描いたもの」つまり「彼の絵」のことである。

⑦8 His knowledge of it surprised me.

⑦8も eventive, non-eventive の解釈が可能である。eventive の場合には⑦9のように基底において, it は know の目的語になっている。

⑦9 The fact that he knew it surprised me.

また, この場合, ⑧0のように「コト」の意味上の下位分類である程度も表わす。

⑧0 The extent that he knew it surprised me.

一方 non-eventive の場合には⑧1に近い基底構造をもっている。

⑧1 Something that he knew about it surprised me.

以上賓辞吸収と eventive construction および Nominalization について述べたわけであるが, これを整理すると, 次のようになる。

1. 賓辞吸収は元来 eventive のみで, non-eventive は存在しないはずであるが, 実際, ある場合には存在する。
2. 賓辞吸収とは各種の Nominalization (Derived nominal, Gerundive nominal, Mixed form) のことである。
3. Nominalization のうち, Gerundive nominal は基本的には fact (event), Mixed form は manner, Derived nominal は fact (event) と manner の両方の意味を有するが, manner も fact も「コト」表現であるので, ここではこれらは event の下位分類の一つであり, その他, 程度, 時間, 方法などもそれに含まれる。

7. Eventive construction と日本語

日本語においては, eventive construction は英語に比べて, きわめて少ない。それでこのことから, 本稿で再度取り上げた⑧2⑧3の文の non-eventive の解釈は理解できるが, eventive の解釈は難解だと思ふ日本の学生は多い。

⑧2 The mere thought filled me with terror.

⑧3 His knowledge of it surprised me.

また⑧4の文において, この it は⑧5, ⑧6の両方の意味を有し, これらは non-eventive, eventive と平行的である。

⑧4 A: He has a nice camera. B: I know it.

⑧5 the nice camera.

⑧6 the fact that he has a nice camera.

しかし一方, 日本語に関して, たとえば⑧7の「それ」は⑧8を表わしているだけであって, ⑧9は普通表わさない。

⑧7 A: あの人はいいカメラを持っている。

B: それを知っているよ。

⑧8 いいカメラ

⑧9 あの人がいいカメラを持っていること。

⑧9のような意味を表わすには⑧0のように「それ」の代わりに「そのこと」を使うのが普通である。

また, 日本語において eventive construction が, 英語ほど自由でないことは, ⑦2, ⑦3, ⑦4, ⑦5, ⑦6などの例

文に対する、直訳的日本語訳を作ってみても明白であろう。

⑨) *The directness of this* confused him.

⑩) ※この率直さは彼をろうばいさせた。

⑪) ?この率直さによって、彼はろうばいした。¹⁶

⑩は⑨の英文とは異なって非文であり、非文を生じさせている要素の一つである非人称主語構文を取り去り、⑨のようにしても、尚不自然さは残り、次の⑭にすれば不自然さはなくなる。

⑭ (ある人が) そんなにも率直だったので彼はろうばいした。

このことは、日本語の *eventive construction* の未発達なことを示している。学術論文など比較的硬い表現に、*eventive construction* が多いようであって、これは英語など外国語からの直訳体の影響であろうか。また漢字表現も、*eventive construction* が多く、これも漢文の読み下し文をみてもわかるように、一種の直訳である。しかし、普通の表現において、*eventive construction* が見られることがある。

⑮ 泥道だから歩けない。¹⁷

⑮において、「泥道」という表現は、「道が泥だらけであるという事実」である「コト」を表わしており、*eventive construction* の例である。

8. 結 語

我々は「コト」を表わす表現を *eventive construction* と命名し、その種々相および、基底構造、派生順序を調べ、特に「モノ」表現で「コト」を表わす *eventive construction* を日本語との比較において考えてきたわけであるが、最後に、再三取り上げて恐縮であるが⑩、⑪の例文によって、日本人の英文理解のメカニズムについて触れてみたい。

⑩) *The mere thought filled me with terror.*

⑪) *His knowledge of it surprised me.*

⑩⑪の *non-eventive* な意味において問題はないので、*eventive* の場合について考えてみる。⑩、⑪についての直訳（これは *non-eventive* の意味と同一である。）は⑯、⑰である。

⑯) その単なる考えは私を恐怖心で満たした。

⑰) それについての彼の知識は、私を驚かせた。

我々は英文を理解するのに、この⑯、⑰の直訳をもとにして、その意味を推測するのが普通である。あるいはこの直訳を通さないで、英語のまま、その意味を理解しようとする場合も、やはり、⑯、⑰の直訳に近い形を頭に描いている。序で述べたように、我々は英語に対してまったく無知であっても、次の⑱、⑲の意味は推察できる。

⑱) その単なる考えによって、私は恐怖心でいっぱいになった。

⑲) 彼のそれに対する知識に、私は驚いた。

日本語には非人称言語構文が少ないのに、なぜこの意味が推察できるのかは、明らかでない。日本語には英語ほど、非人称主語が多くないけれど、存在しないことはないということも一つの大きな原因であろうが、言語の普遍的な性質として、思考の過程の中に、何かが存在していると考えられるが、この点も興味ある問題であって、別の機会に触れられたらと思う。⑱、⑲から⑳、㉑のレベルにいたるには、本稿で述べた *eventive* の概念が必要である。

⑳) そのことを考えただけで、恐怖心でいっぱいになった。

㉑) 彼がそのことを知っていたので、私は驚いた。

⑳、㉑における *thought*, *knowledge* が *eventive* であること、つまりそのもとになっている、*think*, *know* を有するもとの文、つまり基底構造の存在を認識しなければならぬ。基底構造および、*eventive* という概念は、英文理解において不可欠なものであるというのが、本稿の結論である。

注

1. 本稿は大阪大学英文学会総会において、「名詞句の基底構造——コト表現とモノ表現」，“*The Underlying Structures of Noun Phrases — Eventive and non-eventive*”（ハンドアウトのタイトル）の題で口頭発表したものをもとにして、大巾に修正、加筆し、論文にまとめたものである。大阪大学の毛利可信先生、成田義光先生をはじめ、阪大英文学会の諸先生方から有益な助言、御指摘を賜わった。ここに感謝の意を表したい。しかし本稿の不備、欠陥はすべて筆者が責を負うものである。
2. たとえば「話す」、「示す」、「教える」がくる場合には、「知る」という自動詞がそれらに対応する。またこの公式は漸定的なものであって、種々の問題を含んでいるが、本稿では、これ以上触れないことにする。
3. この場合は「コト」を表わす意味のことであり、この文は「モノ」を表わす意味も有するが、これについては後述する。
4. ㉑において、*fact* を含んでいるので、この種の文を *factive construction* とするのが、*eventive* より自然であるように思われるが、Kiparskys (1968) は *factive*, *non-factive* という用語を

別の概念を表わすのに、既に導入しているので、eventive という用語を採用した。

5. 毛利 (1962), P. 201.
6. 毛利 (1962), P. 200.
7. 毛利 (1962), P. 208.
8. Bach (1968), Langendoen (1970), Rosenbaum (1967), Lakoff (1965), McCawley (1970) など.
9. この文の my dog も名詞句であるので, the one that was my dog とすべきであるが, 本稿では eventive に関係のある名詞句だけを扱い, 他の名詞句の構造については略した.
10. 本稿では使用される重要な変形だけをしるしたが, この他にも種々の変形が使われる. またこれらの変形のあるものは, 一回だけ使われるとは限らない.
11. Chomsky (1970) .
12. Chomsky (1970) .
13. Fraser (1970) .
14. 日本語の「コト」には2種類ある.
 - (1) 私は彼が知っていることを知っている.
 - (2) 私は彼がそれを知っていることを知っている.
 この(1), (2)の「こと」の違いは対応する英文をみると明白である.
 - (3) I know what he knows.
 - (4) I know (the fact) that he knows it.
 つまり(1)の「こと」は, 本稿においては「モノ」であり, 本稿の「コト」表現とは(2)の「こと」から来たものである. 奥津 (1974) はこの2種の「コト」を, (1)の「こと」を同一名詞連体修飾, (2)の「こと」を同格連体修飾とし, 次の例文をあげて説明している.
 - (5) 大キイコトハ イイコトダ
 (2)の「こと」 (1)の「こと」

15. 程度と様態に関して, 基底の動詞が (+ state) の場合に程度になり, (- state) の場合に様態になる傾向があるようである.
16. ※は非文法的な文であり, ? は非文法的とは断定できないが, 不自然な文であることを示す.
17. 毛利 (1962), P. 201.

参 考 文 献

- 毛利可信, 1962. 『英語意味論研究』
 奥津敬一郎, 1974. 『生成日本文法論』
 Akatsuka, 1974. "Emotive verbs in English and Japanese."
 Bach, 1968. "Nouns and noun phrases."
 Chomsky, 1970. "Remarks on nominalization."
 Fraser, 1970. "Some remarks on the action nominalization in English."
 Kiparskys, 1968. "Fact."
 Lakoff, 1965. *Irregularity in Syntax*.
 Langendoen, 1970. *Essentials of English Grammar*.
 McCawley, 1970. "Where do noun phrases come from?"
 Newmeyer, 1971. "The source of derived nominals in English."
 Rosenbaum, 1967. *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*.
 Wasow and Roeper, 1972. "On the subject of Gerunds."

(昭和51年1月10日受付)